

当報告の内容は、それぞれの著者の著作物です。

Copyrighted materials of the author.

タイトル: 「「インド世界」の形成: フロンティア地域を視座として」 2021 年度第 1 回研究会 (通算第 5 回目)

日時: 2021 年 7 月 3 日 (土) 15:00–18:00

場所: オンライン会議室

使用言語: 日本語

#### 1. 吉水千鶴子 (AA 研共同研究員, 筑波大学)

「チベット語資料から見るカシミールからチベットへの仏教伝承」

チベットへの仏教伝承の時期は、およそ 761 年から 842 年の前伝期と、10 世紀から 13 世紀にかけての後伝期に大別することができる。前伝期の特徴は、国家主導による戒律の導入や僧院の建立、仏典のチベット語への翻訳事業であり、シャーンタラクシタやカマラシーラといったインド東部出身の仏僧や、オッディヤーナ (現スワート) 出身のパドマサンバヴァが当時の仏教伝来に貢献した。842 年のチベット帝国分裂後、仏教伝承事業もいったん退潮したものの、10 世紀以降は、グゲ・プラン王国など地方政権によって、戒律の復興や僧院の再興などが進められた。この後伝期にチベットはカシミール地方からも仏教を再輸入したほか、チベットとカシミールの学者の共同作業による仏典の翻訳事業も行われた。

カシミール・チベット仏教を研究する上でこれまで利用されていたチベット語資料は、チベット大蔵経の奥書、『青冊史』などの歴史資料、聴聞録・受法録といわれる資料群であった。しかし今世紀に入って『噶当 (カダム) 文集』『藏族史記集成』という新資料が公開されたことで、当時のカシミール・チベット間の仏教ネットワークを研究する材料は著しく増えており、今後我々の理解が一層深まることが期待される。

チベット仏教後伝期に入り、インドのヴィクラマシーラ僧院からアティシャ（982–1054）が招聘されて、中央チベットでの仏教翻訳・布教事業に大きな役割を果たしたが、カシミールとの関係に目を向けると、この時期には翻訳事業のために仏僧がチベットからカシミールへと派遣されていた。代表的な仏僧として、西チベットから派遣されたリンチェン・サンポ（958–1055）、中央チベットから派遣されたゴク・ローデンシェラブ（ca. 1059–1109、カシミール滞在時期 1076–1092?）とパツァプ・ニマタク（ca. 1055–1145、カシミール滞在時期 ca. 1077–1100）を挙げられる。彼らのカシミールでの活動実態は未だ不明であるが、カシミールでの共同翻訳や教育に携わったパンディットたちの名前は、後代のチベット語歴史資料や大蔵經の奥書に多く挙がっている。また、当時の中央チベットでは、ラサ近郊に僧院が増加したが、インド人のパンディットもこれら新しい僧院に滞在して、カダム派と総称されるチベット仏教教学の一派の形成に貢献したことが知られている。中でもサンブ・ネツク僧院のチベット人仏僧チャパ・チュキーセンゲ（1109–1169）は論理学を大成したことで名高いが、彼は当時僧院に滞在していたカシミールのパンディット、ジャヤーナンダと論争を繰り広げた可能性がある。

11世紀後半にカシミールに滞在していたパツァプ・ニマタクは、ナーガールジュナの『中論』、チャンドラキールティの『明句論』、アーリヤデーヴァの『四百論』など中観論書のチベット語訳や、それらに対する注釈を残しており、その一部は『噶当文集』に収録されている。これらの文献を分析することで、翻訳のプロセスが明らかになってくる。カシミールでパツァプ・ニマタクの翻訳に協力していたのは、ハスマティと呼ばれるパンディットで、彼はヴィクラマシーラ僧院で活動していたラトナヴァジュラの孫弟子にあたる。パツァプ・ニマタクはハスマティに師事して『明句論』の解釈に従った『中論』の講義を受け、そこで得た知見に基づいて著述を行った。更に彼はハスマティとともに『中論』の旧訳を修正し、『明句論』も翻訳した。その後パツァプ・ニマタクはチベットに帰還してから新たな写本を入手して、カナカヴァルマンという人物とともに『中論』『明句論』の翻訳に修正を加えたことが明らかになっている。また、パツァプ・ニマタクの弟子シャン・タンサクパによる『明句論注釈』にも、ハスマティや彼のカシミールでの師にあたるパラヒタバドラへの言及が頻出し、シャン・タンサクパがパツァプ・ニマタクを通して聴いた、ハルシャ王の御前でのハスマティの論争や、聖典の権威をめぐるエピソード、パラヒタバドラから聞いた猫の比喻などの話が収録されている。パツァプ・ニマタクが滞在していた時期のカシミールはハルシャ王の治世（1089–1101）にあたり、1100年頃に発生した戦乱のために彼はチベットへ帰還したのではないかと推察される。

11世紀後半のカシミールは、ヒンドゥー教と仏教が共存し、それぞれの学匠が敵対する宗派の教義を学び、討論する環境が成り立っていた。ゴク・ローデンシェラブや

パツァプ・ニマタクは仏教テキストにしか関心を持たなかったと考えられるが、そのようなカシミールの環境のなかで、彼らは必然的にヒンドゥー教系諸学派の教義も否定対象として学んだと推測される。前伝期に仏教を伝えたシャーンタラクシタやカマラシーラは非仏教徒の諸学説にも通暁し、それらを吟味・批判した上に中観思想を頂点とする仏教教義体系を構築したが、後伝期には彼らがカシミールで学んだことで、チベット仏教教理体系の基盤をなす前伝期の学匠たちの考え方と呼応した。チベットでは前伝期から既に、各学説を体系的に解説する「宗義書」の萌芽が見られるが、後伝期には「宗義書」で非仏教徒の学説が批判的に論じられるようになる。これはパツァプ・ニマタクらがもたらした非仏教系の知識と、彼らがカシミールで学んだ結果得られた、異教に対する姿勢から結実したものと考えられる。

小倉智史 (AA 研所員)

「書評: Manan Ahmed Asif, “The Loss of Hindustan,” Harvard University Press, 2020」

本発表でとり上げる Manan Ahmed Asif, “*The Loss of Hindustan*”は、前近代における「ヒンドゥスターン」という地理認識と、英領期における「ヒンドゥスターン」認識の受容、そして現在の「インド」への変化を扱った書籍である。著者 Manan Ahmad Asif は、ウマイヤ朝軍のスインド遠征を伝える歴史書『チャチュ・ナーマ』を主題とするモノグラフを既に発表しており、南アジアのフロンティア史研究者として、世界的な知名度を獲得している。

本書で主たる分析の対象となるのは、17 世紀初めにデカン地方のビジャーブルに主邑を置いたアーディル・シャーヒー朝で編纂されたペルシア語歴史書、フィリシタの『イブラーヒームの薔薇園』である。はじめに著者フィリシタの経歴が検討され、『イブラーヒームの薔薇園』に先立つ南アジアのペルシア語歴史書の伝統を Asif は紹介する。中でもムガル帝国のアクバル宮廷で編纂されたニザームッディーン・アフマドの『アクバル諸章』からの影響を『イブラーヒームの薔薇園』は多く受けており、他にもジューズジャーニー『ナーシール諸章』、アウフィー『困難からの救い』、ミールホーンド『清浄園』などからの影響が看取される。

先行するペルシア語歴史書と『イブラーヒームの薔薇園』との大きな違いは、前者が主としてインド亜大陸のムスリム王朝史のみを扱っているのに対して、後者はマハーバーラタ戦争から始まる非ムスリム王朝とムスリム王朝の歴史を連続させる構成を採用したことである。また、ヒンドゥー教徒に対するフィリシ

タの態度も、他のムスリム史書編纂者たちに比べて中立的であると Asif は指摘する。『イブラーヒームの薔薇園』はデカン、ベンガル、グジャラート、カシミールなど諸地域の王朝史を収録しており、諸王朝が割拠する政治的地理空間としての「ヒンドゥスターン」を構想している。

『イブラーヒームの薔薇園』は 1768 年にアレクサンダー・ダウによって、1829 年にジョン・ブリッグズによって英訳されたが、これらの英訳ではペルシア語原典がもっていた構成は解体され、植民地期に形成された「ヒンドゥーの古代」「ムスリムの中世」「イギリスの近代」というステレオタイプな歴史区分に貢献することになった。このような歴史区分は、第二次大戦後インド、パキスタンの独立という形で政治的な実態を与えられ、今日に至るまでヒンドゥー・ナショナリズムとイスラーム・ナショナリズムに基づく歴史言説に強い影響を与えている。なお本書では、植民地期の歴史家たちの活動も幅広く紹介されており、『イブラーヒームの薔薇園』の分析に加えてこれらの記述も役に立つと言える。

本書の内容にコメントを加えると、Asif が論じている内容の中核部分は、本書の発表に先立つ 2015 年に真下裕之氏によって発表されている（「インド史」の成り立ちについて：「イスラーム」と南アジアの「在来社会」今松泰・澤井一彰編『前近代南アジアにおけるイスラームの諸相：在来社会との接触・交流・変容』2015 年, pp. 1-22）。また、『イブラーヒームの薔薇園』の地方王朝史の記述は、『アクバル諸章』のほとんど書き写しともいえるような箇所が多数見られ、フィリシタのオリジナリティを主張するのであれば、『アクバル諸章』とのより詳細な比較が必要だっただろう。会場の参加者からは、Asif が英領期の歴史家たちの「インド」構想との対比を強調した結果、フィリシタの「ヒンドゥスターン」構想を理想化しすぎているきらいがあるのではないか、というコメントがあった。

（文責：小倉智史）